

中世柳酒の研究

—柳酒屋を中心に—

澤田くみ子

はじめに（中世における酒造業の発達経緯と柳酒の研究史）

室町期には、生産者自身が利潤を対象とする商品生産として、営業の一般化が顕著となっていく。これが、いわゆる酒屋の酒である。

この酒屋の酒である「柳酒」とは、室町時代から江戸時代にかけて、京都を代表する美酒であり、都の公家・武士・寺社などの支配階級の間で、贈答品として多用されたものである。そして十四世紀半ばには、大和僧坊の酒（南都諸白）、天野酒と並んで、天下の銘酒と謡われた酒である。

「柳酒」「柳酒屋」については、小野晃嗣氏、河内将芳氏などの研究者がおられる。

そこで、先行研究を踏まえて、柳酒屋Ⅱ五条坊門西洞院南西頬Ⅱ中興という過程を考えていきたい。また、柳酒屋と幕府・寺院関係についても考察していきたいと思う。

本論 中興家と柳酒屋について

一、「蔭涼軒日録」延徳四年の事件について

先行研究により、柳酒屋は、中興を名字とする一族と深い関係があることが分かっている。かつて小野氏が、柳酒屋Ⅱ中興であるということ述べられて以来、その考えが指示されていたが、これのもとになる史料がすべて、文明十年以降のものであることから、柳酒屋Ⅱ中興と言えるのは、文明十年以降に限定するべきである。

文明十年以降、柳酒屋Ⅱ中興であるのに、延徳四年に、同じ一族であるはずの柳尼公と中興家俊の間には、微妙な差異があった。

家俊は、この時、すでに、幕府と密接な関係であったため柳尼公の窮状に対して、あえて何の動向も示さなかったと推察する。また幕府・慈聖院の結びつき、幕府・中興の結びつきがあったことから、慈聖院と中興の結びつきがあったのではないかとこのことを提示する。

中興は、幕府や慈聖院の保護をうけていると推察したのだが、享禄四年の南禅寺塔頭徳隣庵の所領をみると、五条坊門西洞院南西頬が押さえられていた。よって少なくとも享禄四年の時点において、柳酒屋の本貫の地は、徳隣庵が支配していたと推察する。

二、柳酒屋と妙蓮寺

これらの史料から、柳酒屋・中興に関する注目すべき記事（内容）を挙げることにする。柳酒屋は、たくさんの店

を構えており、日本でも有数の財力を持っていたと思われる。また、中興一族は、大陸系の家柄であったという可能性があるということ。そして、法華宗妙蓮寺は、「柳」の字を分けて、山号を「卯木山」としたということである。

この章では、なぜ柳酒屋の本貫の地が五条坊門西洞院なのかということと、法華宗関係の史料から、柳酒屋と中興の関係について、考察を加えた。そして、この章で強調したいことは、これらの史料の柳酒屋と中興を関係づける記し方は、時代が下っていったため、変化したものと考えられるということである。

三、土倉としての柳酒屋

この章では、土倉としての柳酒屋を考察していった。第二章でも触れたが、柳酒屋は、たくさんの店を構えていたことが関係して、「大柳」「柳」という酒名ができたのではないかということを示した。

そして、明応二年・同三年にも、中興は公方御倉の職を担っていたため、明応期も、中興は慈聖院の保護をうけていたのではないかと推察した。

おわりに

以上のことから、「五条坊門西洞院」「柳酒屋」「中興」が一体となるのは、明応期であると考えられるが、幕府や寺院の影響をうけて、この三つが結実すると考察する。これは、複雑な信仰形態や政治的なつながりという現実の状況のなかで、一体化したものと推察する。

反省として、室町幕府の酒屋土倉統制という大きな枠組で、柳酒屋をとらえることができなかった。これをとらえるためには、土倉としての中興、つまり御倉職のことをもっとつきつめて考察するべきであった。また柳酒という特殊な酒であるからこそ、酒という流通経済についても考察を加えるべきであったのに全くそれができなかった。

今後は、柳酒屋を考察することによって、十五世紀から十六世紀初頭にかけての京都酒造業と室町幕府の関係を明らかにしていきたいと思う。